

はじめに

平成16年9月8日北海道の日本海側の海上を通り抜けた台風18号は、道内の広い範囲を暴風域に巻き込み、各地で観測史上最大の風速を記録した。この台風により全道の約37,000haの森林が被害を受けるとともに、人々の身近なみどり環境である街路樹や公園樹も甚大な被害を受けた。そこで、北海道立林業試験場緑化樹センターでは水産林務部森林環境室森林活用課と連携しながら、全道の街路樹や都市公園などの緑化樹の被害状況について調査を実施した。

この報告書は台風18号による緑化樹に対する風害の状況を明らかにするとともに、人々の日常生活の身近にあるこれら街路樹や公園樹が強い風に耐えて、安全で安心なみどり環境として、今後とも多くの機能や効用を発揮していくための必要な方策についてとりまとめたものである。



第1 要旨

全道212市町村（台風襲来時の平成16年9月現在）において、市街地の公園樹及び緑化樹を対象に調査を行った。台風時の風の強さは各市町村に設置されているアメダスのデータをまとめた（財）気象業務支援センター「気象月報CD-ROM」から求めた。樹木の被害調査は、被害箇所、樹種、被害本数、被害形態を、さらに街路樹は腐朽状態、植栽升の大きさも調査した。

風の強さは道内22箇所の気象観測所及び測候所のうち、14箇所で瞬間最大風速の記録を更新するほど強く、石狩、留萌及び網走支庁管内の沿岸部並びに空知支庁管内で広範囲に強い風が記録された。

緑化樹の被害は13支庁98市町村で発生し、被害本数は公園樹23,522本、街路樹11,992本、合わせて35,514本となった。被害発生は、北海道西半分に集中しており、他に網走管内も多く、逆に日高、十勝、釧路及び根室支庁管内は少なかった。被害発生頻度が高い樹種は、公園樹はニセアカシア、ポプラ類、ヤナギ類で、街路樹はポプラ類、ニセアカシア、ナナカマド、シダレヤナギであった。被害形態は公園樹は根返り、街路樹は根返りと傾斜が多かったが、幹折れや枝折れが発生しやすい樹種もあった。また、幹折れは樹木1本当たりの腐朽数が多い箇所ほど多く発生していた。維持管理では、剪定した街路樹の方が被害発生率が低い傾向が見られ、特に枝折れが発生しやすい樹種は効果が高かった。街路樹の植栽升は、幅が広くなるに従い樹木の腐朽数が少なくなっており、幅は1.50m以上確保するのが良いことがわかった。また、人為的な傷害等が台風被害を誘発している事例も数多く見られた。

